

中部地域 災害医療講演会 東日本大震災で経験したこと

週末の2月1日、東日本大震災をテーマにした中部地区では初めての災害医療講演会を開催した。招聘した講師は、宮城保険医協会のご紹介でお願いした気仙沼市の村岡外科クリニック院長の村岡正朗先生である。



▲講師の村岡正朗先生

村岡先生は、震災直後に歩いて避難所であった気仙沼中学校へ避難、そ

の後の津波により海岸から200メートルほどの位置にあった自宅兼クリニックが水没、全壊となり、そのまま学校保健室に寝泊まりしながら周辺避難所を含めて、ピーク時1,200人の医療救護活動にあたってこられた。

気仙沼市は宮城県の最北端、当時の人口約7万4千人でサンマの水揚げ日本一の漁業の街で知られている。震災では死者・行方不明者合わせて1,357人を出している。震災当日夜に火災で街が燃えている様子が全国にTV報道されたので記憶されている方も多いと思う。また多くの漁船や貨物船が市街地に打ち上げられたこともよく知られている。

震災では、市中心部を流れる大川に津波が遡上し、このため車で避難した人々が渋滞に巻き込まれ山側から流されて命を落とす人が多数に上った。津波の被害は数メートルの高さの差で天と地ほどの差になるという。とにかく命を救うのは早く高台に逃げることなので、10分の防潮堤より高台に向かう広い道路や、海岸近くに津波タワーをいくつも作ることがよほど役立つし金もかからないと強調された。

当時の状況として、避難所のトリアージでは24時間内では殆どが黒か、緑のどちらかで、赤は僅かであった。3月で雪もちらつくという寒さのために、低体温症対策が重要であった。医療状況は350床の気仙沼市立病院が津波から免れていたのでセンターとなったが、他の民間病院の多くは機能停止になっていたため、避難所での医療救護活動をすぐに開始した。救援物資が入るまでは医療器具も医材料もない状況での対応である。

避難所で救急車を呼んだのは喘息発作と大腿骨頸部骨折、肺炎など僅かなケースで、スタッフとともに口腔ケアを重視し、高齢者全員に肺炎球菌ワクチンを接種したこともあってその後は肺炎がゼロになったという。なお、津波とともに瓦礫の土や汚泥、重油などの

吸引で起こるという津波肺については、死んだ人はわからないが、現場の感覚からは殆どなかったということである。

情報は停電のためラジオしかない。スマホも停電のため使えなかったので、被害がどれだけなのか外のことはわからない状況に置かれた。電気がきたのは被災6日目だった。

全国からの支援は必要だが、公平ばかり強調する行政のやり方に疑問がある。必要な人に必要なものを直ちに届けるシステムが必要だ。この点では救援物資の仕分けには女性が担当するのが一番だ。MC(メディカルコントロール)もよくわかっている地元の経験者が良い。気仙沼ではNPOのメンバーが活躍して助かった。

福祉避難所に保育園を使ったがバリアフリーで給食設備もあり大変よかった。ただしトイレは小さいのでポータブルトイレを準備させた。

先生のお話は避難者の心理状態の変化から、仮設住宅は大手でなくいいものを作る地元業者に任せること、とにかく一日も早く平常を取り戻すために仮設診療所を作り、乳児検診も3月中には始まり、住民の気持ちが落ち着いてきた体験など、多岐にわたった。そのいずれもが経験した者でなければ語れない貴重なものであり、静岡県民として予想される南海トラフ地震に備えるための貴重な研修の機会を頂いた。

先生は全国の人々から支援をしていただいたので、呼んでもらえて話す機会をいただき私のほうが感謝していますということであった。土曜日の診療を終え、気仙沼からタクシーで1時間の一関駅に向かい、東北新幹線、そして東海道新幹線を乗り継がれて静岡に来ていただいた先生には心からの感謝しかない。

聞 問 元(調査政策研究部員)